

● 鏡の間 ●

論考を得させるための習作として、「内容と形式」を課題した一例である。

内容と形式

六年

(一) 内容と形式という問題を考えるとき、まづ形式と人間ということ为例にとつて考えてみたい。一般的に人間とは形式ばったことが大すきのものである。たとえば学校では入学式、卒業式。世の中では結婚式といったことである。ではなぜ人間は形式ばったことがすきなものであろうか。

(二) 人間の心とはほんらいとても面白いものである。ちよつとした小さいことでも、とても不安におそわれたりうれしくなったりする。たとえば歩いてるときくつのひもが切れたらえんぎがわるいということできげんになるし、朝茶柱がたつと気げんがよくなる。即ちこんな人間の心とは水のようにである。水は容器によつては丸くなつたり四角くなつたりいろんな形になる。人間の心もそのまわりのかんきによつて丸くなつたり四角くになる。だからもしまわりのかんきようが形式ばつているとしたら、形式ばつたことを人間が必ようとするのもしかたがないのではないだろうか。ではそのまわりのかんきようが形式はどういうことか、それによつて人間の心はどのような作用をうけていくのだろうか。

(三) まわりのかんきようが形式ばつていとは、人間の心がある一か所に固めていしてやるためでもある。つまり人間の心は敏感さにもろいようだから、不安やうれしさなどの人間

の感情がいりまじつてゆらゆらゆれている。形式とはそんな心を一か所にやるということだ。

これを入学式为例にとつてみると、新しい学校に入るといふことでとても不安だ。入学式とはそんな心に対して入学したというイメージをあたえ、安心感をもたせて固定してやるものである。即ち入学式とか卒業式などはたとえてみれば人間の弱い心をおさえ、一か所に固定してやる場である。別にいえばそれは形式ばつていふことだ。ここからよく言う「一形式」なんか」という批判が出てくるのだ。しかしそれは、はたしていけないことなのだろうか。それを考えるには、この形式ばつていふかんきようの中で人間の心はどのように変わつていくかを追求すればいい。

(四) 人間がある一か所に固定してやるのが形式ならば、人間の心の変わり方を表す内容は、どういふことか。これを卒業式にあてはめてみたい。卒業式とはいろいろな思い出をふりかえつてきみしいという感情を表し、また新しい希望を未来に託してこの内容で人間の心を変えさせてくれるものである。そして人間の心は不安やさびしさなどのいろいろな感情を持ち上げるささえとして形式が必ようになつてくる。また、人間の不安をまぎらわしてくるものとしてくれるものとしても必ようでなお必ようである。つまり形式とは自分の心を整えてくれるもので、不安やさびしさ、またうれしさなどの感情をどこか心の深いところにしまつて新しいいろいろな希望をあら

たにするものである。それが形式の中の人間の心の変わり方の内容であらう。こう考えてくると「形式ではないか」とひとことと言いきることもできない。

(五) 形式ばつたことを人間が必ようとしなくなつたときの人間の心の内容はどういうものであらう。形式を必ようとしなない人間の心とは、言いかえれば人間の感情の例外である。はたしてこの例外を大自然界がみとめたか。認めはしない。認めはしないがそれは現実として肯定しなければならぬ。そうしなければ形式にたよつていふ人間の心に進歩がないし、人間否定におちいるからである。人間の心はたえず進歩しなくてはならないものなのだから。さらに、形式を不用にしたときの人間の心をさぐつてみると、形式を不用にしたといふことで、それは人間の心が不安とかさみしさとかいろいろな感情にたえられるようになつていふことになり、事実的にいって人間が強くなつたといえる。しかし、今の人間はだいたい形式にたよらねばならぬいだらう。それは、人間とは弱い生きものであるからだ。そこから形式肯定論も出てこよう。

(六) 今まで考えてきたことをまとめてみると、人間に対しての形式の内容は、人間の心が弱いときにはぜつたいに必ようであるが、人間が強い心へと進歩した場合、だんだんすがたを消していくだらう。その作用としての、形式のいみを考えてみたかったのである。

(東京・檜町小・松原俊一教諭報告)